

平成 21 年 8 月 3 日

牛ウイルス性下痢ウイルス感染をワクチン接種で予防しましょう

防疫課

管内の酪農場から出荷された交雑種雌子牛が、県外の出荷先で牛ウイルス性下痢ウイルス (BVDV) 持続感染 (PI) 牛と診断されました。牛群に PI 牛が存在すると、かなりの経済損失が生じますので、予防に努めましょう。

1 発生までの経過

平成 21 年 1 月生まれの交雑種雌子牛が、2 月に家畜市場経由で県外へ出荷されました。その後、出荷先の農場で BVDV (2 型) の流行があり、同居牛検査を実施したところ、当該牛が同ウイルスの PI 牛と診断され、とう汰されました。

2 疫学調査

- (1) 当該牛の母牛は、子牛が PI 牛となり得る妊娠時期 (胎齢 30 から 100 日前後) に公共放牧地に放牧されていました。
- (2) 当該牛の母牛に BVDV ワクチンは接種されていませんでした。
- (3) 当農場では、平成 21 年 2 月に 4 頭の流産が発生していました。

3 同居牛検査成績

- (1) ウイルス分離 : 同居牛全頭 (41 頭) : 陰性
- (2) 抗体検査 : 39 頭 (95.1%) が抗体を保有し、うち 24 頭 (61.5%) は BVDV (2 型) と考えられました。

4 考察

- (1) 疫学調査から、当該牛は放牧地で感染したことが強く疑われました。
- (2) 当農場では当該牛以外に PI 牛は存在しませんでした。
- (3) 大多数の同居牛が同ウイルス抗体を保有していたことから、当該牛が同居牛に同ウイルスをまん延させたことが示唆されました。
- (4) BVDV 抗体価が高い流産牛も存在したことから、同ウイルスが流産にも関与した可能性が伺えました。
- (5) 公共放牧地やキャトルセンターなど様々な農場からの牛が集合する施設を利用する場合は、予め同ウイルス不活化ワクチン (1 型と 2 型を含む) の接種が必要です。
- (6) また、各農家でも育成牛へのワクチン接種が望まれます。

5 参考

牛ウイルス性下痢・粘膜病については、当所 HP『牛ウイルス性下痢・粘膜病をご存知ですか?』
<http://www.pref.iwate.jp/view.rbz?nd=719&of=1&ik=3&pnp=17&pnp=65&pnp=707&pnp=719&cd=5762> を参考にして下さい。